コムズフェスティバル映画祭 シネマ&トーク 報告

愛を積むひと

2/18（土）
13:00～16:00

「つなげよう ひろげよう 男女共同参画の輪」を総合テーマに掲げたコムズフェスティバルの締めくくりとして毎年開催している映画祭。今年は、夫婦、家族、人と人とのつながりの大切さや生き方について描いた「愛を積むひと」を上映し、トークゲストに、朝原雄三監督をお招きしました。

◆ 作品内容 ◆

第二の人生を大自然に包まれた美しい土地で過ごそうと、北海道に移り住むことにした夫婦、篤史と良子は、かつて外国人が住んでいた家で暮らし始める。良子は篤史に家を囲む石塀作りを頼んだが、以前から患っていた心臓の病を悪化させて、この世を去ってしまう。

そんな時、篤史のもとに妻からの手紙が届き…。夫婦愛、親子愛、そして血のつながりを超えた縁。北海道の四季とともに描く珠玉の愛の物語。

◆ トークゲスト ◆　映画監督　朝原 雄三 さん

1964年香川県生まれ。
1986年京都大学文学部卒業、松竹株式会社入社。
父親の影響で映画監督になり、「釣りバカ日誌」シリーズ、「武士の献立」などでメガホンを取る。
映画に対する思いや、二人の娘さんをもつご自身の生き方についてもふれて、お話をうかがいました。

◆ 監督トーク ◆　テーマ「つながって生きる」

聞き手：館長

静かな物腰で謙虚に語られる監督。映画のキャストの話や、ロケ地北海道について、また、ご自身が映画監督になられたきっかけなど、和やかな雰囲気の中でお話はすすみました。

トークから抜粋して一部をご紹介します。

朝原監督

この作品に込めた思い

監督

50 歳の時にこの映画をつくったのですが、助監督さんや周りのスタッフの方がだんだん年下になってきて、次の世代に何かを残していかなくてはいけないと思いました。私は山田洋二監督の弟子といわれています。山田監督にも先輩がいて、親にも育ててもらって、なんとか今を生きている。この縦のつながりや横のつながり。それらをつないでいくことと「石を積む」という行為が重なり、コミュニティの構成員である私たちを石の一つひとつになぞらえ、脚本を書き上げました。

館長より監督へ質問

映画もいろいろな領域がありますが、ヒューマンドラマ的なものに身をおこうと思われたのには、何か理由がありますが？

監督

入社した松竹は、小市民的で家庭的な伝統の中で映画をつくってきた会社です。今はそれが主流ではありませんが、僕はその最後の世代なので、自然とそうなって、嫌いではなくなっていました。ですので、いざつくるとなると、こういう人間ドラマに気が向くのかなという気がします。

館長より、会場の方へ質問！

- 地域の中に気の合う仲間はいますか？
- あなたの家に時々訪ねてくる友達や地域の人はいますか？
- あなたが時々訪ねていく友達や地域の人はいますか？
- 地域の中で家族以外に頼りにしている人はいますか？
- 自分のことを世話好きだと思いますか？
- 地域のひとに「あなたのこと頼りにしとるよ」と言われたことはありますか？

この質問に対して「はい」と答えられるのは女性の方が多く、そういう友達が少ないという男性が多いですが、監督は男性としての生き方、どうでしょうか？

監督

友達は必要で、周りの仲間と仲良くやっていくことも必要です。友達を作ろうとどこかに出かけていくものではなく、自然と友達ができる…そうありたいと思っています。また、かかわらざるを得ない人にどうかかわり、どう接していくかが考えなくてはならないことだと思います。
イスラム人やアラブ人のことを思っても、なかなか手を差し伸べることは難しいけれど、基本的には隣に住んでいる人や会社で一緒に仕事をする人たちとどう付き合っていくか、どう愛していくかしかできないと思います。
傲慢な人生をそれなりに歩んできましたが、これからはもっと優しく、自分が去っていく世の中、あるいは娘が生きていく世の中に、少しは役に立つ生き方をしたいという気持ちがあります。そして、そのことが、友達や仲間を増やすことにつながっていけば一番いいと思います。

館長より会場の皆さんに伺いました

「映画を観ての思いはありますか？」

会場の男性

現在単身赴任中で、コミュニティの中で誰かとかかわることがあまりありません。今のうちから地域とかかわっていかないといけないとは思いますが、はたと自分はどうするのか、今、考えています。

会場の方から監督へ質問

「監督さんのいわれる『いい映画』とはどんな映画ですか？」

監督

「いい映画」というのは、そう安易につかってはいけない言葉かもしれません。いろいろな観点があり観たい映画もそれぞれ違うので一概にはいえませんが、自分の中のひとつの基準は、人間の気持ちがわかる、くみとれる映画にしたいということです。「あんな人いるよね」と思わせるだけでも、監督、映画の力ってすごいと思います。

最後に、映画を通して何かを訴えるというよりは、「こういうひとっているよね」というコミュニケーションする内容の映画をつくり、自分で楽しみたいと締めくくられました。

◆ アンケートに寄せられた声 ◆

とても心温まる、人生について考えさせられる映画で感動しました。
（30 代・女性）

小さな石も大きな石も必要だし、いろいろな個性があっていいと思いました。古い石に新しい石を積み上げていくことは人生そのものであると感じました。
（40 代・女性）

有意義な時間になりました。
（30 代・男性）

自分の生きている意味を一つの石に置き換えてみたら、小さな石でも役に立つのではと思いました。（40 代・女性）

今後の生き方を考えさせられました。人と良いつながりをもちながら、悔いのない日々を過ごせたらと思います。
（70 代・女性）

涙ぽろぽろ、これからの終活を考えます。（60 代・女性）

人は一人では生きられないです。周りの人とのつながりを大切にすること、出会いを前向きにすることを学びました。
（50 代・男性）

心がほっこり温まりました。監督さんが誠実な方です。「人の気持ちを惹きつける」ストーリーが私も大好きです。自分がかかわっている人たちに感謝しながら観ました。（50 代・女性）

我が家も息子といろいろあり、両者に良い方向性が選択できそうです。
参考になりました。（60 代・男性）

朝原監督が大切にされていることが伝わり、とても心が温かくなりました。
（60 代・女性）

当日は約 280 名の皆様にご参加いただきました。つながって生きる。そして次の世代に何をどうつなげるのかについて考えるきっかけとなる、貴重な時間となりました。
たくさんのご参加、本当にありがとうございました。